

リレー 随 想

第10回

福岡いのちの電話教育委員
スーパーバイザー

本山 智敬

(福岡大学人文学部准教授)



ムーミンの国のダイアログに学ぶ

昨年の9月から1年間、イギリスのノッティンガム大学に客員研究員として滞在しました。その間、オープンダイアログの視察研修のため、フィンランドを2度訪れました。オープンダイアログは、ヘルシンキよりも北のラップランド地方にある病院で生まれた、主に急性期の精神病患者さんを対象とした早期介入のアプローチです。そこでなされることはまさに「開かれた対話」。その対話によって患者さんの入院期間が短縮されたり、投薬の量が減ったり、予後が良いという結果が見出され、今世界中から注目されています。

オープンダイアログでは、患者さんの「モノローグ（独白）的」語りを「ダイアログ（対話）的」語りにしていくことを大事にしています。対話を通して、患者さんの中だけで完結し未だ語り得なかった体験を、他者と共有可能な言語表現にしていくのです。さらに興味深いのは、この対話は何かのための手段なのではなく、対話そのものが目的であることです。オープンダイアログの実践者たちが口々に言うのは、「不確実性への耐性 Tolerance of Uncertainty」という言葉です。時に対話がどういう方向へ行くのか、果たして良い終着点が見つかるのか、よく分からないことがあります。先の見えなさに不安な気持ちになったりもします。しかし彼らはすぐに助言したり、結論を急いだりせず、患者さんと共に不確実さを生きるのです。それを支えるのが、まさにその場の対話の質を高めていこうとすること、それ自体なのです。

オープンダイアログの考え方を学んだとき、私の心に「いのちの電話」の相談員の皆さんの日々の活動のことが思い起こされました。匿名での一期一会の関係の中で、助言をするわけでもなくただ通話者の話に耳を傾ける、そこに一体どんな意味があるのだろうか

と思うことも、時にはあるかもしれません。しかし、電話をかける前は「一人語り」でしかなかった通話者の思いが、相談員の皆さんの関わりによって「対話」になっていくということ、そして通話者が自分の思いを聴いてもらったと感ずること、その偉大さに改めて思いを寄せるのです。やはり私たちは、電話の先につながっている通話者との対話をより良いものにしていこうと努力すること、それに尽きるのではないのでしょうか。オープンダイアログの思想からは、「相手を変えたい、コントロールしたい」と思う気持ちを横に置き、対話によって相手を理解すること、まだ語られていなかった思いを共有していくことの重要性に立ち返ることができます。

援助と理解については、デンマークの哲学者、キルケゴールの支援術の中にあるこの言葉に出会いました。「他の人を助けるには、その相手をより多く理解する前に、まずは相手が理解していることを、私は理解しなければなりません。謙虚な気持ちで関わり、相手を支配しようとするのではなく」。援助とは、外側からの客観的理解ではなく、本人の内側にある主観的体験をまずは理解するところから始まるということでしょう。私は傾聴についてずっと学んできましたが、学びの道のはまだまだ続いていきそうです。

